一九八二年十一月四日

北海道知事選挙の出馬表明にあたって

横路孝弘

一、出馬への決意……1
二、私の政治姿勢……2
三、道政にのぞむ政治理念……2
四、道民の皆さまへの私の訴え……6

一、出馬への決意

(一) 今日、私は、来春の北海道知事選に立候補することを表明すると共に、ここにいたる私の心境と抱負、決意の一端を申し上げます。

(二) 二月以来、数多くの道民の皆さんから、次期道知事選に出馬せよとの御要請を繰り返しいただいて参りました。他方、国会にあって更に努力せよとの声もあり、私自身、大いに悩みぬいたことは事実であります。

しかし、私は、熟慮を重ねた上で、政治家の原点に立ち、私の道を選びとりました。即ち、今日まで私に期待を寄せ私を支えてきて下さった多くの人びとのすすめに従い、その人びとにつながる多くの道民の皆さんの声に応えて、私の判断を決しました。

私はこれまで衆議院議員として、大蔵、予算、安全保障、ロッキード等の委員会に身を置き、わが国の外交、財政、安全保障、政界浄化の分野にあって微力ながら努力を重ねてきました。党中央にあっては、党改革のために奔走してきました。いうまでもなく、そうした私の活動のすべては、この北海道に足をおくものであり、私の志は、私に変らぬ期待をかけてくださった町や村々の人びとの想いと重なるものであります。その多くの同志の人々の声に従って私の道を決するのは、政治家として当然のことであります。

(三) 従って、政治家としての私の信条と初心は、国会にあっても、道政にあっても、まったく変るところはありません。金権と腐敗の一掃、平和の実現、憲法の遵守、

国民の誰もが参加できる政治、そして、人間らしい豊かな地球社会の実現――私は、これらの課題に向かって自らに鞭打ち、全力をあげることを約束いたします。

二、私の政治姿勢

私は、いま出馬表明にあたり、次のような姿勢をもって道政にのぞみ、その政策課題実現の責任を果したいと思います。これは、私の政治姿勢としての公約であります。

(一) 広く道民の力を結集し、道民本位の行政を行なうために、あくまでも、私は道民党の立場をつらぬきます。無所属で立ったのもこのためであります。

(二) 道政に民主主義を徹底します。道民の皆さん、市民団体、経済団体、労働組合などと広く対話をすすめ、とりわけ各市町村の積極的な道政参加の道をひらきます。

(三) 道政の科学化と合理化をすすめ、道政における無駄の排除と道政の公開を行ないます。タブーをおそれず、あらゆる問題に検討を加えます。

(四) 実際的現実的改革をはかり、一歩一歩、「静かなる改革」を推し進めます。

三、道政にのぞむ政治理念

一　活力あふれる、民主的な道政

北海道は、先住民族の昔から開拓の時代、戦後の開発を経て、いま新たな時代の前にたたされています。広大な土地、すぐれた自然に恵まれ、進取の気風とバイタリティーにとんだ道民性をもつ北海道の可能性は大きくひらけています。

私は、当面の諸問題の解決と同時に、二一世紀にむけて、「大いなる北海道の時代」をつくるため、その可能性を経済や文化、教育などの分野で、限りなく追求します。

それには、なによりも道民から出発した道政、道民の目にみえる道政、人と人との心のふれあい、心がかよいあう道政にかえなければなりません。特に重要なのは、道と市町村との協力関係です。道庁は、査定官のように市町村に君臨するのではなく、市町村の自発的活動、自由な発想を重んじ援助し、そして調整するといった、いわば市町村連合の「事務局」になることだと思います。

きれいな政治――金の力や権力で発言の自由が抑えられるようなことがあってはなりません。行政は、政治に対して中立でなければなりません。身の廻りを大切にする草の根からの民主主義を育て、声なき声に耳を傾け陽のあたらない場所に陽をあてていきます。また婦人の道政参加をはじめ、適切な情報公開を含む道政への参加システムをひろげていきます。

二　表情豊かな、強い北海道経済

北海道は、第一次産業を中心に、主として国の財政に大きく支えられ、また官公需に多くを依存してきました。しかし、これから国際化の波を受け、財政の厳しい低成長時代の中では、道民の知恵とエネルギーを結集して、個性と活力に満ちた経済の自立体制へと努力しなければなりません。

私は、北海道の大地、道民の強靱な意志と創意を基盤に、道内各地域の風土と特性を生かしつつ、競いあい連帯してすすめる「新北海道計画」を推進します。

その基本の一つは、北海道の産業構造の高度化ということです。先端技術産業を導

入し、機械金属工業などの活性化を積極的に図り、域際収支の改善に努めなければなりません。

二つには、北海道の生産物を活用し、高度加工を行なって附加価値を大きくする地場産業の推進が大事です。同時に、農林水産業、鉱業は、北海道の基礎産業ですから、国際化時代に対応できる強い体質を作っていかなければなりません。

観光産業も、一次産業から三次産業まで幅広い関連を持ち、雇用効果も大きく北海道にとって重要な産業です。民間と行政との協力関係がとりわけ大切なポイントになる分野です。

これらの産業を柱に、新しいソフトエネルギーの開発。道民の衣食住、生活文化を創造する多様な中小商工業の発達。北国の生活、レクリエーション、福祉、文化、観光を高めるための各分野にわたる生活に密着した産業を作りだす総合的北海道プランがたてられなければなりません。

三　地域に根ざし、世界にひらく北海道

北海道は、確かに厳しい自然条件をかかえています。しかし、日本の多くの地域が、過密の中で諸活動に限界を来している中で、広大な土地、美しい自然、豊かな海岸線を備えた北海道は、まだまだ未知数の魅力ある大地だと思います。

過疎過密、自然破壊、公害――人間と自然との不協和音がいわれていますが、私は、北海道において緑をたくさん取り込んだ都市作りや、緑の中の工場などを追求して人間と自然のあり方の理想的モデルを作っていきたいものだと考えます。

私はこれまで民間外交の一つとして「緑の地球」運動を呼びかけてきました。北海道が、その地理的位置、特性を生かした国際的な役割を果し、経済、文化、平和交流

のリーダーとなるように力を尽したいと思います。

外交というのは国と国との関係だけではありません。地方自治体としても、例えば農業の自由化問題をめぐってアメリカと、シベリヤの天然ガスの導入をめぐってソ連との相互交流は、おたがいの友好を深めるために大事なことです。自治体レベル、地域レベル、道民レベルの民間外交を活発にすすめます。

四　生活者の心がかよう「あたたかい道政」の推進

人間として、健やかに生き、働き、子どもを生み育て、安心して老いていける社会、これが人びとのささやかな願いだと思います。

しかしまた、誰しもが年を取り、病にかかったり、ハンディを負ったりする可能性を持つことも事実です。お年寄りや子供たち、病人やハンディを持つ人たちに、〝やさしくない〟社会は、人間らしい社会ということはできません。道政は「希望・安心・連帯」という指標を常に高く掲げて、施策の不充分さを点検、補うだけでなく、人間の原点に立った新しい発想や望みを汲みあげ具体化する努力を怠ってはなりません。

新しい時代は、パンだけではなく「生活の質」を問われる時代です。「生活の質」を基準にした施策の統合化、総合化による「あたたかい社会」を追求しなければならないと考えます。

医療や福祉事業にたずさわる人びと、交通や都市設計に責任を持つ人びと、保険や雇用にかかわる人びと、老人や身障者、病気の人びと、いろいろな人たちの力や知恵を借りて、行政の出来ることを大胆にやっていきたいと考えます。

同時に、厳しい北海道の冬を生きぬく生活環境や交通環境の整備と共に、かけがえのない北方の自然を、子や孫に受けついでもらえる環境を作っていきたいと思います。

五、人間らしく生きぬく力を育てる教育

最後に、私の気持ちとして、最も大事にしていきたいのは教育の問題です。

北海道が新しい時代のパイオニアとなるためにも、次代を担う若者たちが、たくましく、すこやかに育ってほしいと願っています。

「健康で、心のやさしい子ども」に育ってくれれば、どんな可能性もひらけています。子どもたちにも、いろいろな生き方があってよいと思います。本当は、「落ちこぼれ」なんかいないはずです。子どもたちをみつめ、知恵をだしあうことが心要です。この原点にかえって、大いに議論のできる自由な雰囲気を作り出すための条件づくりに力を注ぎます。

北海道の風土に根ざしたすぐれた文化や芸術を発展させ、世界的ひろがりの中で新たな創造活動をすすめる独自の文化や芸術を活発にしたいと思います。

四、道民の皆さまへの私の訴え

私は、父、横路節雄の死によって、政治の場に責任を担う人生を歩き始めました。いま、知事選挙への出馬を決意する中で、かつて二十四年前、父が北海道知事選を闘い、そして敗北に終ったことを思い起しております。

今回の知事選も、勝利があるとすればそれは不可能を可能とするような厳しい闘いであることを、私はかみしめております。しかし、道民の皆さんと私との〝道政を変えよう〟〝あたたかい生き生きとした北海道を作ろう〟という熱い想い、燃えやまぬ自治への想いがあれば、その奇蹟を起すことが出来ると信じています。

〝出るからには勝つ〟――私はその不退転の決意でこの闘いに臨みます。

かつて、進取の気風に富む私たちの父祖は、厳しい自然と幾多の困難とたたかいながら荒地に鍬をふるって、この北海道を築いてきました。家族を引き連れ未知の地へ渡ってきた彼らは、私と同じ世代、あるいはもっと若い世代だったかもしれません。

私も、四代目道産子として、二一世紀にむかって〝今、再び開拓精神を〟と訴えます。

北海道を心から愛する皆さんと共に、世界に広がる新しい時代の開拓者、パイオニアとしての北海道を築くために、私の全力を注ぐ決意です。